

今回、寄稿させて頂くに当たり、陸上競技のみならず、自分のスポーツとの関わりを振り返ってみたいと思います。自分とスポーツとの関係は、楽しい、面白い、と言うよりは、ひたすら痛い、苦しいのに耐えて、やっとその余韻に浸る、いわば「ど M」パターンの繰り返しでありました。非常にありふれた話かもしれませんが、暫しお付き合い下さい。

このど M 人生の始まりは、中 1 の春に入部した剣道部での体験でした。大阪市内でも、結構柄の悪い地域の片隅、早朝から酔っ払いの姿も散見される古い商店街の裏に建つ自分の中学は、グラウンドの狭さゆえか元々入りたかった陸上部は無く、何となくチャンバラにあこがれて入った剣道部の部活は、非常に狭い体育館での、卓球、バスケット、体操の他に女子の薙刀まで含めた雑居状態。新入部員は、到底防具を着けての室内練習などはさせて貰えず、ほぼ半年間、もっぱら校外のランニングを含めた基礎練と、ひたすら竹刀の素振りに明け暮れていました。しかも、理由は全く不明ですが、この練習の間、足元は全て裸足。校内はまだしも、学校の周囲は小石やガラス片も散らばっている様な道で、犬猫の大小便はおろか、時には酔っ払いのまだ新しい吐瀉物も有る中を、飛び跳ねながら走っていました。ランニングの後は、延々と続く膝 90° 直角（電気椅子と呼んでましたが）の下半身強化、そして現在では絶対にやらない様な、異常に長い距離のうさぎ跳び。手を抜くと、先輩のケツパン（竹刀による尻叩き）が飛んで来る、と言う、画に描いた様な昔の運動部風景でした。そして、やっと冬に入る前頃から防具を着けられる様になったものの、経験者や自前の防具を持っている者は皮の胴着ですが、未経験者が着けるのは割り竹を繋いだ胴着で、竹刀で胴を打たれると、衝撃がもろに身体に響いてジンジンしていました。今思えば、メンタルのど M もこの頃醸成された様な気がします。何よりも、外傷はともかく骨や筋肉のダメージを受けることの少ない、足腰の強靭さの基礎は、この剣道の部活で培われたと思います。ただ、その代償かもしれませんが、足裏を気遣いながら裸足で一般道を走っていたせい、膝が外に開いたすり足のランニングフォームになったのも、この頃からの様な気がしています。



合宿中に練習を終えて  
左：筆者 右：新 25 回清水 秀氏

高校入学と同時に陸上部に入部し、望んでいたランニング漬けの生活が始まりました。ただ、自分の高校は伝統的に短距離中心で、かつ 4 継とマイルでのインターハイ出場が至上命題で、新入部員も半ば強制的にどちらかのリレー要員に分かれる様な恰好でした。最初に、新入部員一人ひとりに 100 と 300 を走らせる適性検査みたいなのが有り、自分はマイル要員の方に入りました。いわゆる短長パートではありますが、パー

トリーダーだった当時のキャプテンがとにかくインターバルの好きな人で、ひたすら 150x10-15 本か 300x8-10 本の繰り返し、1 週間に一度、300か 600 のレペを入れるパターンでした。自分は、このキャプテンの有り様に心酔し、直ぐにインターバル信者になりました。とにかく本数をこなす極限の疲労感からゾーン状態を目指すのがキャプテンの信条でしたが、それへの信仰はどんどんエスカレートし、初めての夏合宿では、新入部員は 7-8 割の



昭和 52 年関西インカレ 1 部 800m 予選 1 周目 183 番が筆者

軽減メニューになる 100 全力走 x40 本 を、嬉々としてフルメニューで走っていました。キャプテンの最も大きな影響はもう一つ有り、これまた自分が彼に心酔した所以でもあるのですが、とにかくスタートから全力で飛ばしラストを粘る、と言うレース展開を愚直に貫くタイプでした。キャプテンの代から 3 年間、自分が 3 年夏のインターハイまで、マイルは 1 走か 3 走、たまに個人で走った 400 と 800 を含め、全てこのパターンで通しました。結果吉と出たレースは片手も無く、記憶に残っているのは、ケツ割れと敗北感が殆どですが、満足しています。

このパターンは、大学でも一層強くなり、個人種目の 800 は勿論、マイルや駅伝においても、どうしても玉砕型のレース展開となってしまう、チームに迷惑を掛けること多でありました。バトンを貰う、襷を受ける、つい頭に血が上って… と言いつくしますが、本能的に「レースとは頭から突っ込むもの」と脳に刻まれてしまっている様な気がします。

社会人になると、また違った形で、この性癖に拍車が掛かりました。商社に就職して、半ば強制的に会社のラグビー部に入れられ、最初は陸上経験者と言うことでウイングのポジションでしたが、殆どボールが回って来ないので、ボール奪取に突っ込んでいる内に、ポジションがどんどん前になり、8 年目で豪州駐在となって向こうのクラブチームに入れて貰った時には、なんとスクラムの第一線、2 番（フッカー）になっていました。ラグビーの FW プレー、特に第一列はど M の極みで、前後の人間の体重を首一本に掛けて押し合いをする間、頭は割れそうに痛く、耳はつぶれる、背骨はきしむ、の繰り返し。その中で、ボールを搔くために相手のフッカーと脚を蹴り合い、ボールが出たら、よたよたしながら一番後から追いかけていなければならない、それでいてボールに触れる機会の最も少ない、まさに骨折り損みたいなポジションです。終わった時の疲労感、虚脱感は半端ではありません。ただ、この虚脱感に、400 を走り終わった時のケツ割れ、徒労感と同種の匂いを感じ、ひたすらそれを求めて耐える、そんな「ど M」性向が、ここで完璧に醸成された様な気がします。雨天の試合で、好んで泥濘のボールにセービングする、太腿の生傷が絶えず常に「ビフテキ」状態、こんなラグビー生活がほぼ 40 歳近くまで続きました。



豪州駐在中地元紙に掲載されたラグビープレー中の筆者（タックルしている方）

そこから約 10 年を経て、もう一度、ランに戻って更なる「ど M」ロードが始まりました。50 歳を前に、会社の仲間に誘われた皇居ランが始まりで、10k、ハーフマラソンと距離は延び、2 年後にはフルを走りました。高校・大学時代を通じて、「〇〇を何本」「全力」は大好きだが、ジョッグやロングのペース走は大嫌いだっただのが、ロングジョッグはおろかマラソンを走るようになるとは思っていませんでしたが、長い距離を走り続けることの辛さ、その先の徒労感が、どこかで達成感に代わることを理解出来る様になりました。そこからは、どんどんエスカレートして、通常のロードレースでは飽き足らず、個人で富士山の麓から走って登る富士登山競走や富士登山駅伝、そして富士五湖を周回する 100K レースと、変態度が高まっています。目下、密かに狙っているのは、荒川の河口から遡って小諸から信濃川を下って新潟に至る 520K を走破する「川の道」レースで、残念ながら家人の許可がなかなか出そうにないのが難点ですが。

以上、身体があげる悲鳴、「痛い」「しんどい」を糧に、その先の一瞬の達成感を味わいたいが為にスポーツを続けて来ました。この「ど M」人生行き着くところは何処なのか、果たしてゴールは有るのか、全く見えませんが、とにかく行けるところまで走り続けたいと思う、今日この頃です。

以上